



『白鳥の湖』を踊るマリア・コチェトコワ 撮影：Erik Tomasson

今月号の日本語ページでは、昨年夏の世界バレエ・フェスティバルに初参加し、たちまち日本のファンを心をとらえたマリア・コチェトコワのインタビューを全文紹介します。

——どうしてダンスを始めたのですか？

はじめは体操を習っていたのですが、先生の一人にバレエを勧められました。母はその気になりましたが、私はいやでした。バレエって何もかもピンクでシリアスな感じがなくて、女の子っぽすぎるように思えたんです。でもバレエ学校に通い始めたその日から、夢中になってしまいました。全く雰囲気の違う世界で規律のレベルはとても高いし、先生方も厳格。私は10歳になるまでバレエについて何も知らなかったこともあり、最初はレッスンが辛かったです。でもポリショイ・バレエ学校は世界でも最高峰の一つだと思うし、そこで訓練を受けられたのはラッキーでした。ここで学ばなければ、私は今のようなダンサーにはなれなかったでしょうね。

——ロンドンに移ったのはなぜ？

最終学年の時にローザンヌ国際バレエコンクールに出場して、ロイヤル・バレエの研修生の資格をいただけたんです。この時はまだ自分の将来について何も決めていなかったのですが、コンクールは熾烈で入賞するのもとても難しかった。だから、そこでチャンスを与えられたのは運命で、これは何としてもトライしてみなくてはいけない、断ることなんてできないと思ったんです。そしてロイヤルで1年間過ごした後、イングリッシュ・ナショナル・バレエ(ENB)に入団して4年間踊りました。

——ロンドン時代にはどんな印象をお持ちですか？

学校を卒業後すぐにやってきたのですが、何もかもが自分が慣れ親しんできたことと違っていました。クラス

も、団の雰囲気も、作品も、リハーサルも。英語も話せなかったし、初めは苦しかったですね。でも時間はかかっても、慣れることができました。

——ロンドン時代に一番気に入ったのは？

もちろん、レパートリーです。ロシアにはあんなにいろいろな作品はなくて、クラシックだけ。マクミランもマッツ・エックもマーク・モリスも見ることがなかったし、ポリショイはいまだに彼らの作品を上演していません。それから、個性豊かなダンサーたちを観察して多くのことを学びました。学校時代には、リハーサルと舞台しかありません。そしてコーチが「さあクラスよ、さあ本番よ、さあコンクールよ」と指示してくれます。でもカンパニーに入れば先生はいません。途方にくれているので自力でやっていく道を見つけなくてはいけないんです。ロイヤルにいた1年間には踊る機会は多くありませんでしたが、自分がどれほど踊りたいのか、改めて認識しました。

——サンフランシスコ・バレエに移籍した理由は？

レパートリーに惹かれてです。ENBにいた間にほとんどの作品は踊ってしまいました。もっと他の、たとえばウィールドンの振付などには常に注目していて、こんな作品を踊ってみたいという思いが募っていきました。実際に舞台を見ては、自分に問いかけていたんです。「私に踊れるかしら？」イエスかもしれない、ノーかもしれない、でも挑戦してみたかった。ENBの最後のシーズンに芸術監督のウェイン・イーグリングが、デイヴィッド・ドーンズの『私の肌に百万回のキスを』をレパートリーに加えました。それまで知っていたものとは全く違う動き方で、とても楽しかったです。ハンス・ファン・マーネンの『3つのグノシエンヌ』もすばらしかった。古典だけでなく、こんな作品をもっとたくさん踊れたらと思いました。サンフランシスコ・バレエは、何年前かにサドラーズ・ウェルズ劇場でロンドン公演を行ったときに見ていました。こうして自分が新しいことに挑戦したくなってみると、それを思い出して、あそこで踊りたいかもしれない、と思ったんです。サンフランシスコでは生まれて初めて、私のために作られた作品を踊ることができました。芸術監督のヘルギ・トマソンやユーリ・ボソホフ、クリストファー・ウィールドンの作品です。

——アラ・オシペンコにジュリエット役を習ったとか？

ええ、ミハイロフスキー劇場(レニングラード国立バレエ)に客演した時に。それはもうすばらしい経験で、オシペンコ先生は演劇的に私が全く知らなかったジュリエットを教えてくださいました。ある場面の演技について質問したところ、立ちあがってお手本を示してくださいましたが、まさにこれだと実感できました。

——2009年の夏にはダニール・シムキンと東京に招かれ、世界バレエ・フェスティバルで踊りましたね。どうやって共演が実現したのですか？

まず彼が招待されて、パートナーを探しているんだけど連絡がありました。じつは私たちはそれまで一緒に踊ったことがなくて、お互いのスケジュールを睨みながら調整して、あちこちの街でリハーサルしました。開幕を飾る『ドン・キホーテ』全幕に主演し、『チャイコフスキー・パ・ド・ドゥ』、『パリの炎』『海賊』のパ・ド・ドゥも踊りました。東京の観客は世界一ですね。とてもバレエを愛していて、自分の能力の限界を超えてもっといい踊りをしたいと思わせてくれます。